

「学ぶ構え～“共創”で織りなす教育～」

木村 正男（埼玉県八潮市教育委員会）

1 『志ある 恒ある 識ある』に倣って

教師の駆け出し時は、目の前のことをこなすのに精いっぱいであった。やがていかに浅学であるかを思い知るが、かろうじて「問題意識」だけは持っていた。問題が生じたり行き詰まったりしても、同僚に問い、書籍を求め、現場に出かけることは厭わなかった。そんな中、懸命にもがいていると、一寸したきっかけでアイデアや解決策が浮かぶことがあると学んだ。後になって、「思念が業をつくる」というのがあり、人は思ったことが原因となり、やがてそれが結果として現実になるのだということを知った。「人生は心に描いたようになる。」と言うが、考えてみれば、そもそも何も思わなければ出発点にも立たないわけだから、これらのことは正鵠であった。

教師生活の後半に、稀代の漢字学者である白川静先生を知る。『志ある 恒ある 識ある』を、己の心の向かうところで地に足をつけて物事を明らかにする努力が必要、と勝手な自己解釈をし、先生の真摯な姿に触発され、それ以後は何かにつけて密かなよすがとしてきた。

2 “チーム大曾根”の教育実践

私は、学校経営のミッションをつくる際に、教育目標『輝く笑顔と夢いっぱいの学校』が頭から離れずにあった。それは、創立以来学校が大事にしてきた子ども像であり、教職員や保護者のまっとうな願いが込められ、夢と希望は連動し合い日々の生活を一つ一つ取り組む中で意欲のエネルギーになるからである。これを受け、「子どもの学校での充実は笑顔にあらわれ、夢は目標となることをふまえて、学び浸り教え浸ることに全力を傾けて、意欲溢れる子どもを育む。」とミッションを表現し全職員に浸透を図った。

一人ひとりの子どもを生かしぬく教育を基本にし、生かしぬくについては、子ども自身が存立体系として自分自身の命を生きていることの確認の上に立って、教育を進めていくことであるとした。端的に言うなら、『子どもは大人の縮図ではない。』である。生かしぬくためには、学習主体である子どもを知ることが出発点であり帰着点である。そこで、子どもの「気持ち」「能力」「悩み」の三つが読み取れ、『子どもはその教師が好きなことが総てである。』『子どもは家庭を背負ってここにいることを受け止め、笑顔で可愛がる。』そんな教師になることを一人ひとりに求めた。

今、学校を取り巻く状況は一変し、信が無ければ学校の力は半減と言ってよく、また教師の力のみに頼る教育にしなやかな対応が求められている。このことをふまえ、“チーム大曾根”という合言葉を看板にし、保護者を含む地域社会と共に歩み、創っていく学校を目指し、そのキーワードを“共創”とした。この言葉の意味するところは、学校・保護者・地域社会がそれぞれ自分と他者との違いをしっかりと認め合い、節度ある関係の中で新し

い教育秩序と信頼を築こうとしたものである。

(1)『思えば思われる』 ～彩のある人間教師～

教師の人間性とは何だろうか。私は、曇りのない目で子どもたちや親や社会をまっすぐに見つめ、愛情を注ぐことであると単純化している。最初から偏見や先入観を持った目で見ると、見えるものも見えなくなり、結末は決定的に違ったものとなるのは必然である。

私は『思えば思われる』を自己に意識化させ、自身の狭隘な人間性を補ってきた。この言葉は、相手の立場に立っての自らの働きかけであり、「情けは人のためならず。」とは対極にあり、結果は期待しない一方通行的な思いである。教師は人を育てるのが仕事であり、もし子どもや保護者や同僚に嫌悪を抱くことがあるなら、どうしていい仕事ができるのか。

そして教職員には、「人に相性があるのを否定しないが、人によって対応を変えたり好き嫌いを露わにしたりするなど、おくびにも出してはならない。むしろ、好きになる努力をしよう。」と強く姿勢の変革を求めた。毎日学校に通ってくる子どもを教師が好きにならなければ、それだけで教師失格である。私は、このような姿勢を貫けば、相手が子どもであろうと大人であろうと、やがてこちらの思いは通じると信じている。

ところで、教師は誰の味方であろうか。子どもの味方は当然であるが、では親はどうか。子どもの味方であるなら、その親だって味方ということだ。親が住む地域社会だって味方のはずだ。しかし、食い違いやボタンのかけ違いは、どこでも日常茶飯事に起こり得るし起こっている。どうしてか。それは多分に固定観念や偏見にとらわれたり自己中心的だったりして、相手の声に耳を貸さず、互いに許容できないことが大きな要因ではないだろうか。教師は、伝えるべきことは伝えなければならないが、それが独善であってはならない。独善に陥らない術は、伝いたいことも大事だが、相手がどう受け取るかということも同等に大事なことであると考えることである。物事は、受け入れられなければ所詮絵に描いた餅である。

また、私たちは「前向き」という言葉を使うが、それはまず受け入れることが前提で、諸事に敏感になり、人間社会に関心を持つということである。多彩なことに関心を抱き考え続けることは、何よりも自己を豊かにし成長させることに他ならず主体的な作用である。「井の中の蛙」であってはならない。

(2)『前例通りは思考停止状態』～経営（学校・学級）の根っこ～

4月に始まり3月に終わる学校。この1年の間に授業を中心に据えながら、子どもたちの学校生活を豊かにすべく様々な行事が、ほぼ前年と同様に行われる。私は、行事に積極的に取り組むことによって、子どもたちが成長の糸口を掴んでくれることを願ってきた。だから計画書が提案されると、担当者には「ねらいは何か。昨年と変えた点はどこか。」等を改めて問うことにしている。昨年とは比較にならないほど成長や変化して

いる子どもたちに、全くのコピーは失礼である。担当者は、問われたことによって再確認したり気付いたりすることもある。考え抜いた末に同じだったらそれはそれで良いが、教師は成長の源である感動をそれぞれの機会に用意しなければならないと思う。

私たちの意識には、「有意」と「無意」とがある。これに注意力を結びつけるなら、「有意注意」は対象について目的を持って意識や神経を集中させることであり、「無意注意」は反射的に動くのみと言える。もし、私たちが「無意注意」に陥っているとすれば、それは思考停止状態であり、単に経験をなぞることになる。教師の命であるべき授業も同様で、毎時間毎時間の指導は常に改善がなされなければならない。教材研究をせずに、指導書に頼り切ったものであったり固定的な指導観に沿っての授業だったりしたなら、子どもたちの学力向上や教師との人間関係は推して知るべしと言えないか。

学校（学級）もチーム（集団）であり、校長（担任）の意図や目標が隅々まで浸透し、一枚岩でいるほど強固な組織である。指導者（責任者）にはそれぞれ個性があるが、大事なことは明確な旗を掲げてチームを束ね、結果を出すことである。当たり前に行えるまで繰り返し教え、このようにすべきであると言い続け、対話を続けることが不可欠である。

学校での子どもたちの居場所は学級であり、保護者の最大の関心もここにある。「先生は我が子をどう見てくれているか。」「友達と仲良くやれているか。」がすべてである。この社会的な集団である学級内では、一人ひとりの子どもたちの人権が保障されていなければならない。それは、「安全」「所属」「承認」「自己実現」という観点においてであり、ここでの基本は他者へのかかわり方が人権尊重で貫かれているかどうかである。下記に、その一端として取り組んだ授業例を記す。

《事例》 小学校3年生の『ソーシャルスキル』の授業

言葉によるいじめの兆しが表面化してきた折に実施し、教育課程の中にソーシャルスキルの授業を新しく組み込み、全学級で「人間関係づくり」を目指した。初任の女性教師が「仲良くなれる魔法の言葉をつくろう。」との主題で授業を行い、言われて嫌な言葉を出し合った後に、心があたたかくなる19個の言葉を子どもたちが考えた。

じょうず、がんばったね、ありがとう、よくできたね、いっしょにやろう、すごいね、ドンマイ、とくいなんだね、ファイト、手伝おうか、おねがい教えて、うまいね、よかったね、おめでとう、ごめんね、入れてあげるよ

教育の場では、毎日のように問題が起こり即応的に対応しているが、教師の強力な指導力（抑え込み）で解決する場合とそうでない場合がある。いじめなどはどちらも含まれ、教師と子どもの間、子どもと子どもの間に「思いやりの関係」を築かなければ、陰にこもるだけである。この授業の後には、子どもたちが出し合った言葉の持つ力により、あたたかさあふれる雰囲気学級内に醸し出した。相手に対する警戒心や緊張や不安がなくなり、言葉を掛け合える存在となり心が安定し安心できたからである。

このことを契機に、問題が起きてから対処する学校の姿勢を根本的に改め、保護者に

は学年に応じたソーシャルスキルの授業を公開し、学校が打って出て家庭への問題提起とした。

(3)『わかる→かわる』 ～授業力のある教師～

「研修は教師の責務である。」と言われるが、そのように言われるのはなぜか。教師の多くは、子どもが好きで、教えることが好きで、憧れる恩師に触発され、その職を目ざしてきた人は多い。そして、経験が浅い間は、目の前の子どものことを理解できず、教え方も上手いとは言えない。勿論、経験を積みればそれらを克服できる部分はあるにせよ、子どもから尊敬される教師になれるかといえそうとも限らない。私は、『学ばざる者教えるべからず。』の言葉を至らなさを自覚し続けるために戒めとして心に刻んできた。

「授業で勝負する。」の言葉があるが、確かに教師の仕事は子どもたちに授業を行い、相応の学力をつけることにある。学力の指標となっているのが、所謂学習指導要領であり、教科書はそれを踏まえて編集され、この教科書を十二分に活用して、教師は学力を形成することに腐心する。教師は、教科の論理の下に編集された教科書を用いて授業をするが、学力（普遍的）獲得は容易なことではない。それは、学力獲得が子どもたちの生活と密接に絡んでいて、家庭や地域社会との間に強い関係性が作用しているからである。

中でも保護者の普段の言動と子どもの学力には相関関係があり、「規則的な生活習慣をしている子は学習意欲が高い。」や「保護者が本に親しむ家庭の子は成績上位。」等の事例もある。学習者が価値である学力に影響されるなら、「勉強は面白い。」等の質に転嫁し向上心を形成できるが、教育環境に高まりが見えない場合では日常生活（親や家庭の在り方）に流され、子どもたちの学ぶ意欲（主体性）が薄れてしまうのは必然である。

従って、教師はそれらのことを打ち砕くぐらいの努力で「わかる授業」をしなければならないが、前述のようにこの授業を受け入れる子どもの背景にも同じぐらいの力を傾ける必要がある。学びとろうとする力（主体性）は、生活や地域社会を見つめた中にしか存在しないし、その中で如何に目的や目標を持たせるよう働きかけができるかが教師に課せられている。今後も、学校が立地する地域に様々な違いはあるが、教科の論理と生活の論理に着目しなければ学力の向上は望めないし、併せて授業力のある教師にも人間味のある教師にもなり得ない。

本校には、全員で取り組む“学校研究”があり、様々な研究委嘱を受けて複数年かけて研究課題に取り組み、この中に位置づけられて教師は授業を公開して授業力を磨いている。私は、この授業力形成の場を次の表のように二通り（A研究・B研究）用意し、学校としての継続研究（A研究）は全員が英知を集め学校というチーム力を高める場と、個人の努力をひたすら追求する場（B研究）にし、それぞれの充実と定着を目指してきた。

	A 研究		B 研究	
	伝統研究の継承（体育の教科）		個人の力量向上（プロパー教科）	
1 年目	6 月	鈴木、佐藤、田中、山本	9 月	伊藤、斉藤、加藤、山田、吉田
	11 月	渡辺、高橋、小林、中村	1 月	佐々木、井上、木村、松本、清水
2 年目	6 月	伊藤、斉藤、加藤、山田、吉田	9 月	鈴木、佐藤、田中、山本
	11 月	佐々木、井上、木村、松本、清水	1 月	渡辺、高橋、小林、中村

A 研究は、6 月及び 11 月の授業研究会までそれぞれ数回に渡って学年や学団の研究会を開き、学校として協力同心の視点を前面に出した。この中で、授業のねらいや展開は勿論、補助具の開発や作成を一緒に行い、先輩から後輩に、経験者から未経験者に伝統研究が引き継がれて前年より良いものを求めていった。ここでは、指導者による深く多面的なアドバイスを得た。

B 研究は、他人に頼ることができず個人の現在持っている力量そのものが必然的に出る。授業者には厳しく、結果として『花の年には花の授業を、松の年には松の授業を』（芦田恵之助）となる。指導者のいない授業後の研究会は、自分のことは棚に上げて意見を言うことが前提なので、活発な議論となり、自己の努力不足や甘さを痛感する教師も続出した。

前述したが、教師は自ら学ぶことによってのみ子どもの前に立てるということをわすれてはならない。教育の玄人として教科プロパーとして、何時でも何処でも誰にでも授業を提案し続ける構えが大切である。

（4）保護者・地域社会とともに ～節度ある関係の構築～

一昔前まで、学校は地域社会に抱かれて、「おらが学校」との自負心を持ち、惜しみなく協力し学校を支えてきた。今でも、全国各地にはそのような学校や地域社会はたくさんあり、その地域に根ざした中で子どもたちが育っている。それが公立学校存立の基盤である。だから学校が地域社会から乖離すれば、その存在意義は薄まり、人々の意識からは遠いものとなることは自明である。

今日、子どもたちの生活舞台である地域社会は変貌が著しく、中でも保護者の意識は大なり小なり学校教育に影響を及ぼし、このことに学校は目をつむることはできなくなっている。むしろ、前述したように学校の味方は保護者や地域社会であるからこそ、このことを機敏にとらえて見合った対応の枠組みを築かなければならない。

『民信なくば立たず』（『論語』）は不易の言であるが、私は学校教育に信頼を得るための方途として実践した①早朝の立ち話の輪に ②嬉しいと有難いの関係 ③ありがたい（親業）宣言 ④親子講演会について以下に記す。

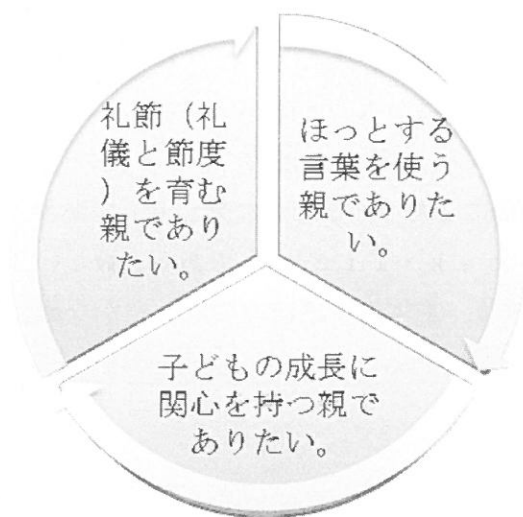
① は、学区域内を自転車で廻ることであり、そのほとんどは早朝子どもたちの集合時間前に行くというシンプルなものである。ここには、学校で見ることのできな

い子どもの姿や保護者同士の遠慮のない会話があり、この中には「学校や教師を褒める話」や反対に「苦情とも言える話」が遠慮なく出てくる。特に後者は何よりも即時の解決が優先され、その場で解決したことも多々ある。校内にいては得られない大事な時間であった。

- ② は、独自に創り上げた“応援隊”と呼ぶものである。これまでも学校はPTAに協力をいただき、一体となって行事等に取り組んできたが、さらに恒常的にかかわり教育の一翼を担っていけないかと考えた。そこで、5つの“応援隊”（安全、学習、環境、チャレンジ、図書）を設け、それぞれ10～20人の保護者と地域の人々の力を借りた。この実践は貴重な関係を生み出し、その象徴が「嬉しい」と「有難い」である。学校の役に立てて嬉しいと感じる保護者と、手伝ってもらって有難いと感じた教師が育ち、まさに“共創”の具体化であった。

- ③ は、通称“ありがたい宣言”と呼び、余裕のない親子の関係を親が意識することによって見直そうとしたものである。「関心を持つ」は「愛情を持つ」と同じ意味であり、「ほっとする」には「親子の温もり」を重ね合わせた。また、「礼節」と少し難しい表現をしたが、ここにはいつの時代になっても変わらない不易の価値があることを押さえておきたかった。この宣言は、PTAの場において段階を踏んで検討され、ポスターとなって全家庭に周知した。学校は、保護者や地域社会と

ありがたい（親業）宣言



の関係をどのように築くか、の中でこれらは生み出された。私は、学校が遮二無二に主導的立場に立って教育しようという考えは取らなかった。「子どもたちが幸せになってくれたら」は、すべての大人の素朴な願いである。このために肩肘を張る必要はないし、ひたむきな努力だけで十分である。互いに認め合い尊敬しあい、足らないところを補い合いながら、教師と親と子どもが双方向で円を描いて展開していく教育こそが、地域に根ざした教育なのではないかと考えていた。

- ④ は、毎年11月の第一日曜日に授業参観日を設けているが、これはなかなか学校に来ることができない父親等を念頭において実施してきたものである。しかし、現実にはその大多数は我が子の授業を見終われば帰路についてしまう。この父親の姿は、子どもに真摯に向き合っているとは言えず、何とかしなければと一人感じてきた。多くの学校はこのようなことを深く考えずに、毎年恒例で実施しているのが現実である。そこで前例にとらわれずに工夫したのが、学校に来る機会の少

ない父親等に直接訴えかける“親子講演会”であった。授業を参観した後、体育館に集まり親子が同じ話を聞き、終了後即座に一緒に帰るというものである。この案内のネーミングは、『授業を見て、話を聞き、親子で一緒に帰ろう』とし、4回の内容は以下のとおりである。

	講演者	内 容	参加人数
1 回	小沢 治夫 (北海道教育大)	成長期のアクティブライフ ～体力・気力・学力は生活から～	児童数+保護者 約 250 名
2 回	野井 真吾 (埼玉大)	生き生きキッズの秘訣～規則正しい生活習慣の形成を～	児童数+保護者 約 240 名
3 回	木村 正男	子どもたちの今を応援する～学校生活の肯定感醸成～	児童数+保護者 約 280 名
4 回	石黒 貢 (市教育長)	体力づくりは生きる源～体力の必要なわけ～	児童数+保護者 約 250 名

体育館は、子どもたち 500 人と P T A 会員の 70 パーセントほどの保護者でいっぱいになり、映像や実演等を使つての話に耳を傾け、ある保護者は「こんなに親が参加した集まりは初めてだった。」と言い、中でも来校する機会の少ない父親に訴えかけができ、翌日の「家でお父さんと話した。」の声が寄せられた意味は大きい。

私は、信頼への一歩は“知ること(知らせること)”であると思っている。人は、わずかでも知っていれば頭からの否定にはならないが、もし全く知らなければ「どうなっているんだろう。」と不安だけが大きくなる。従つて、知ことは理解や安心に繋がり、これが着実に積み重なればやがて信頼への道になるのは確かである。

考えてみれば、①朝の立ち話の輪に ②嬉しいと有難いの関係 ③ありがたい(親業)宣言 ④親子講演会などは、学校の主体性を軸にした「ゆるやかな繋がり」であり、社会学で言うところの“ウイーク・タイズ(Weak・Ties)”である。厳しい社会環境の中で生活する保護者と連携を図る方法は、主体的で継続的でゆるやかな働きかけで繋がるのが最良と思えたからである。

3 教科プロパーを目指す

中学や高校の教師は、取得免許状に示された教科の授業を行うのが一般的である。現在、小学校においても芸術教科や理数教科に専科教師が増えてきた。理数科における専科教師の増加は、各種調査における子どもたちの理数科離れや諸外国との比較テストなど、現状を反映した専門教育の必要性の要請も大きい。

以前は、教師というだけで専門と見なされ、更なる専門は問われなかった。だから、音楽や美術等の以外の教科でも、「あの先生は〇〇が得意だ。」等の評判があり、それなりのステータスがあったが、最近はそのような声をほとんど聞かない。社会の進展は、教師と同程度の(或いはそれ以上)の学歴や知識を持った社会人を増やし、相対的に教師の専門性

を薄める結果となった。いや、教師が不勉強になったと思いたいが、それは言い過ぎであろうか。

小学校でも中学校でも、「ゲストティーチャー」という授業形態で、その道に通じている人を招き教師の足らざる部分を補っている。一人の教師がすべてに精通していること等あり得ないのだから、一つの授業形態としては良いが、安易に受け入れているのなら問題である。教師自らが努力を怠りフィールドを狭めることは、教師という職業に対する揺らぎに繋がることを懸念する。

子どもたちは教師をよく見ている。それは、親以外に密に接する大人だからである。爽やかで知性豊かな教師は、いつの時代でも憧れの対象であり続けてほしいし、親には恵まれないけど熱心な教師によって、よりよい方向の人生に導かれたりすることもある。私の高校生時代に、柴田先生という憧れの教師がいて胸を熱くした経験があり、世界史の授業や容姿は今でも目に浮かぶ。勿論、我が明治大学にもそうした先生がいた。私は、今の時代だからこそ、教育と教師への信頼を確立するためには、真の教科プロパーが必要であり、一つのことに秀でる教師が求められていると考えている。

人は、嫌いなことは長続きしないが、好きなことは継続できるものである。好きだということは、それだけでそこに素質があるのではないかとさえ思っている。教師となり、好きな専門教科を深めることは、学ぶ喜びであり知る楽しみであり、更には仕事への自信となる。

私事になるが、平成23年度の初任者研修の一環で、「指導法研究」の授業を行い、初任教師の技量を高めるための示範授業という位置づけであった。

授業は、興味関心（意欲化）→地図の読解（技能理解）→文章まとめ（習得）という外発的動機から内発的動機に展開し、「資料の内容・提示方法」「興味関心の持たせ方」「板書とノートの関係」「話し方と雰囲気」等で、授業は教師の人となりも含めた総合力であることを感じてもらった。子どもたちに対しては、地図帳の読み取りを通して地図帳の魅力に気づかせ、知的好奇心の醸成に繋ぐものであった。

この授業実施には、高校・大学（地理学専攻）と地理分野に人一倍の関心を持ち、日常の中で授業に使える資料の収集に努め、積極的に授業の機会を得てきた背景がある。好きなことを継続してきたからとも言える。

今、子どもたちの“学ぶ意欲”を高めることは、教師の最大の課題と言っても過言ではない。中でも、学ぶ楽しさを軸にした授業構想や授業展開は、教師が身に付けなければならない実践的な指導力であり、これは偏に授業への飽くなき「構え」と重なる。個として教師に力を蓄えなければ、専門職としてやっていけない時代になったのである。

4『疾風に勁草を知る』

今、教育や教師に親和な風は吹いていない。目を転じてみれば、最新の国勢調査では、高齢者（65歳以上）と年少者（15歳未満）の総人口に占める割合は、世界最高と最低を更新し、少子高齢化は一層鮮明になった。また一人暮らしも3割を超え、労働人口は5年間で

300万人減少した。日本社会は空前の様変わりの時代に突入している。

そして、人々はかつての自信を持てないでいるが、これが真の人々（日本国民）の生きる姿であってはならない。このような社会を背負い、課題に挑戦し展望を切り開いていく子どもたちには賢さが必要であり、その賢さは根っこのある賢さでなければならないと思っている。根っことは「家族・故郷・国」であり、これは人格の基である“三つの母”（母親の愛情・生まれ育った母なる大地・母なる言語）そのものである。人は、これらの母を土台として心に刻み込み、そのことが感性となって後を生きるものである。そして、人として生まれ、生きてきてよかったという人生にしなければいけない。

教育は文化の継承であり創造である。人と人との交わりの中で互いに影響し合って営まれてこそそのものである。だから、このことに携わる教師には大きな責任があるが、一人一人の教師が持っている知識は、断片の寄せ集めに過ぎず些細なものである。「我以外皆師なり。」のごとく、これを結びつけて他の価値にできるかどうかは、偏に教師個人の姿勢にかかっている。

他者に交われば、他者は必ず何かを発する。その発したことにどう感応するかが大事なことで、往々にして人は自己の狭い枠の中でそのことを判断し、時には切り捨ててしまう。そうではなくて、そのことを素直に受け止めて次に繋げる学びの契機とするのか否か。この差は、大きく伸びる人とそうでない人との分かれ道である。

教師が教職という仕事を通じて子どもたちの人生を想い、その人格形成に少しでも影響を与え、それらに喜びを感じることができたなら、それは社会でよりよく生き、個人としてもよく生きた証でもある。

明日の日本を背負って立つ子どもたちに寄り添い、まっすぐ前を見つめ立ち向かう教師人生も満更でない。変わることをない精進を続けたいものである。